

# 超常探偵ほーむず file1.5 男 子高生がただラーメンをすす るだけの話

伊南鴉雀

顔、無いの？

これは、グレイ捕獲作戦が成功を収めた、およそ一週間後の話である。

俺こと渡無船人《わたなしはくと》は今、駅前に一人、バカ面でつつ立っていた。

休日の昼間という事もあってか、大勢の人が目の前を通りすぎていく。家族と、友達と、恋人と、それぞれの人達は、それぞれの目的で。自分たち以外の人は、物は、まるで存在していないかの様に。ただ、自分達の目的の為に。彼らをここまで運び、彼らが運ばれていく電車が、駅が、ただの手段である様に。彼らはただ、目的地だけを見て――。

って待て待て。なんで俺は、こんな詩的で素敵な思考に陥っているんだ……？

これはきっと、あいつのせいだな。うん。そうに違いない。人を呼びつけた当人が遅れてくるとは。ちゃんとした教育を受けて来たのか？ こっちはもう、かれこれ30秒も待ってるんだぞ！？ 小学校で5分前行動って習っただろ！ 親の顔が見てみたいよ！！

……いや、今のはやっぱり無しで。あいつの親と直接対談は、流石に怖すぎる。

何故俺がそう思うのか。それは――。

「やあ、どうしたんだい？ そんな無愛想な顔をして」

「いや、お前の親の顔を見てみたいと思ってんだ」

俺は、正面から歩いてきた男に返した。

「うーん。難しいね。僕たちの種族には、顔っていう概念が無いから」

ちなみにこの男とは、俺が詩的素敵思考をしている間ずっと、目が合っていた。

「それは残念だ。数量限定商品が、ちょうど自分で売り切れたくらい残念だよ」

「それって残念なの？」

「という疑問を持つ程度に、残念って事だ」

「……相変わらず君の言う事はよく分からないね」

物分りが良くて助かる。

俺に話しかけてきたこの男。いや、男というには幼く、少年と言うべきかもしれない。こいつが俺を待たせていた張本人であり、俺のクラスメイト、車那大宙《くるまなだいちゅう》であった。俺達は、ここ金戸《こんと》市に居を構える〈私立超常学園〉の生徒であり、現在は高等部1年である。元々クラス内でも目立たない存在であった大宙と、高等部から編入してきた俺。何事もなければ、わざわざこうして休日に会う様な事は無かっただろう。逆に言えば、この状況に至る為に色々あったのだが、その辺りについて詳しくは、先日まとめた「超常探偵ほーむず 迷子の猫と迷探偵」に書いてある。

結果として、今日は大宙がオススメのラーメン屋に連れていってくれる事になっていたのだ。俺自身は食にこだわりが無い為、多分味は分からないのだが、お礼だという物を無碍に断る訳にもいかない。

そんなルンルンうきうきのイベントなのだが、ここでひとつ、残念なお知らせがある。

「家津さんは……まだ来てないみたいだね」

大宙が、周囲を見回しながら言う。

「いや、それがですね大宙さん。先輩、今日は来れなくなっただけですよ」

何故か俺は、井戸端会議のおばちゃん口調で言う。

「それは困ったな。また別の形でお礼をしないと……」

「いや、気にするな。先輩も『気持ちだけで十分だよ。調査費をちゃんと払ってもらえればね』と言ってたし」

「あ、あれ、やっぱり本気なんだ……」

大宙が苦笑を浮かべる。これについても詳しくは「超常探偵ほ一むず 迷子の猫と迷探偵」を読めば分かる。なんか宣伝してるみたいだけど、気のせいだろう。うん。

「そういう訳で残念ながら、今日は男二人だ。……何が悲しくて男二人でラーメンを食べなきゃならんのだろうな」

「それじゃあ今日は止めるかい？」

「いや、行く」

俺は当然の即答である。

「○×△。それじゃあ、とりあえず行こうか」

俺の返答に対し、大宙は聞き慣れない謎の単語を発して歩き出した。この辺りが、こいつの親とは会いたくない理由に繋がる。

「醤油、とんこつ、しお、か。大宙のオススメは？」

「うーん、好みによるけど、僕はバランスの良い醤油をオススメするよ」

「了解。すみませーん！ チャーハンと餃子を一人前！」

「ラーメン食べようよ……」

大宙に連れてこられたのは、駅からほど近く、路地を一本入った所にある小さなラーメン屋だった。その外装は簡素であったが、比較的入りやすい雰囲気を持っていたと思う。実際に、一部で評判になっているのだろう。俺達が着いた時には既に、店の外まで列が伸びていた。その列に並び、待つこと30分。店内に通されて、席に着いてから最初のやりとりが、これだった。

店内には十程度の席しかなく、その全てがカウンター席である。個人経営のラーメン屋としてはよく清掃されており、若い女性でも入りやすそうな雰囲気であった。

「冗談だよ。ラーメン屋を紹介されて、ラーメン食わない馬鹿はいないだろ」

「うん。この惑星のラーメンは基本的に美味しいけど、ここのは格別だからね」

「すみませーん！ 唐揚げも追加で一人前！」

「えー……」

大宙があまりに不満そうな声を出すので、結局俺は、しおラーメンを頼んだ。果たしてそんなに食えるのだろうか……。

それはそれとして、これからラーメンが出てくるまでしばらくかかる。良い機会なので、いろいろ聞いておこう。

「なあ大宙よ。俺としてはお前に聞きたいことがあった色々あるんだが」

「へー、どんな？」

「まず、お前どこの惑星から来た……って設定なんだ？」

俺は、単刀直入に聞いた。

先程からのこいつの発言で分かると思うが、こいつはこの地球の外から来た宇宙人だ、と自称している。しかも実際に、現代の技術では実現不可能な事もやってみせている。

「いや、設定じゃなくて本当に僕は宇宙人なんだけ——むぐむぐ」

「しー！ 声大きい！ お前な、もし誰かに聞かれたらどうするつもりなんだよ。大騒ぎになるだろうが」

大宙があまりに普通に喋った為、俺は慌ててその口を押さえた。

しかしどういう原理か、俺の脳に直接、大宙が語りかけてくる。

“大丈夫だよ。この惑星の人間は宇宙人なんて作り話だと思っているから。そんなの信じないよ”

(いや、現に俺は信じてるだろ。そういう人がいないとも限らないじゃないか)

と、俺は心の中で思ってみる。まさかこんな事で、大宙に意思が伝わる訳が——。

“君が特別なんだよ”

通じてた……。

つまり、大宙と物理的に接触している限り、俺の思考は筒抜けって事なのか……？

若干の恐怖を感じた俺は、慌てて大宙から手を離す。

「ま、まあ良い。とにかく、どういう設定なんだ？」

「答えても良いけど、君に理解できるかな」

「そんなの、聞かなくても分かるだろう？」

勿論、分からないに決まっていた。

「じゃあそれは置いておくとして、なんでわざわざこんな辺境惑星の地球くんだりまで？」

宇宙人に聞く事としては、実に妥当かつ、模範的質問である。彼らが地球に来る理由といえば、本命は侵略、対抗が和平を結びにというところだ。しかしこの大宙、なぜか高校生に身を落とし、毎日しっかり授業に出ている。知り合って間もないとは言え、そんなに大逸れた事をしている気配は微塵も無いのだ。

俺は大宙の答えを待ったが、返ってきたのは、なんとも拍子抜けする内容であった。

「ああ、それはね、夏休みの課題だよ」

「……え、あ、ああ。そう。夏休み、夏休みね、うん。宇宙にも夏休みってあるんだな。宇宙夏休み、とでも言えば良いのか？」

「呼び方はどうでも良いけど……。学校の課題でね。他の惑星の文化風俗を調べてくるってのがあってさ。それで僕は、この惑星の、この街を選んだんだよ」

なんというかもう、はいそうですか、としか言えなかった。夏休みの課題って……。嘘かほんとか分からないが、嘘だとしたら下手すぎるし、ほんとだとしたら馬鹿らしすぎる。

そして俺は、友人の言うことを疑わない。だから、これは馬鹿らしすぎる話という訳だ。

「なんでまたここを？」

「宇宙ダーツで決めたんだよ」

「……ん、ああ。あれね。うん。知ってる。知ってるよ？」

本当は知りません。

そこの所は大宙も察したのか、事細かに説明してくれる。

「宇宙ダーツっていうのは僕の命名なんだけど、僕達の種族が把握している全宇宙を特殊な技術で2次元に投影して、そこに矢を投げるんだよ。それで刺さったのが、この街だったって訳。勿論、何段階かに分けたけどね」

流星は俺の友人。適当過ぎる決め方だった。

しかし、意外に面白そうではある。

「そうすると、ここにはどれくらいまで居るんだ？ いや、それ以前に、いつから居た？」

「この惑星の時間で言うと、大体1年くらいは滞在する予定だよ。今はまだひと月目だね」

「と言うと、お前も学園には高等部から入ってきた訳か……って、待てよ？」

今は4月。俺が超常学園に編入して、まだひと月も経っていない時期だ。そしてこいつも、それは同じだと言っている。それにも関わらず、大宙は書類上、超常学園に中等部から在籍し、そのまま持ち上がりで高等部に進学した事になっている。勿論、クラスメイトの皆もそういう態度で接している。これは、どういう事なのだろう。

俺がそれを聞くと、大宙は簡潔に、恐ろしい事を言っただけだ。

「ちょっと、書類と記憶をね」

「そ、そうか。記憶もか」

宇宙の技術は凄いな。人の記憶も操作できるなんて。

俺が恐怖半分感心半分で頷くと同時、「はい、しおラーメンの方」と、注文した品々が出てきた。俺の前に次々と置かれていく、ラーメン、チャーハン、餃子、唐揚げ、お箸、そして伝票。見るからに、量が多かった。

そこで俺はこの宇宙人と地球の架け橋になるべく、素晴らしい申し出をする。

「大宙よ。餃子と唐揚げを半分やろう」

元々、今日はこいつの奢りなんですけどね。

「そうなると思ってたよ」

「なんだと……！？ 貴様、まさか未来視の魔眼か！！」

何だか今日は淡々とした会話が多かった為、ここで一つ盛り上がってみよう、と叫んでみたのだが……。

「せめて、予測装置と言って欲しいね」

否定しない……………だと！？

宇宙ヤバイ。ヤバイよ宇宙。

それからしばらく、俺達はただ黙々と箸を進め、レンゲを振るった。

流石に大宙がオススメというだけあって、美味しい。主にチャーハンが。ラーメンも美味しいが、特にチャーハンがうまい。初めはこんなに食べられるか心配だったが、チャーハンがうまい。あまりのうまさに、チャーハンがうまい。チャーハンがうまい。チャー……うま……。

「おーい、舶人、聞ってる？」

「……はっ！」

俺は、大宙の声で我に返った。

「あ、ああ。もちろんだ」

「そっか。それで、家津さんはなんで来れないって？」

「ああ、えっと。先輩の友達の友達が、最近常に人の視線を感じるとかで、相談に乗ってるよ。ストーカーかも知れないって」

「ふーん。視線なんて、物理的には存在しないはずだし、僕たちの種族にはそれを感じる事はできないんだけど。地球人は特殊な感覚器官でも持ってるのかな？」

「ああ、実はな。地球人は肌が敏感なんだ。ちょっとした空気の流れの違いで、物体の有無が判別できるんだよ」

「へー。そうなのか」

俺は大宙に、全力で嘘を教えた。最近こうして、地球人を誤解させるのが趣味なのだ。

勿論あとで気が向いた時に、誤解は解いておく。それが原因で星間戦争にでもなったら、流石に責任が持てないからな。

そうして、以降俺達は完食まで、一言も喋らなかった。

男同士だと、こんな物だろう。

## 友達の定義

会計後、船人は家津さんと合流すると言うので、途中まで一緒に行くことにした。

「いやー。今日は食ったなー。こんなに食べたのは、小学生の時に経験した、初めてのピュッフェ以来じゃないか？ いや、中学でわんこそばにチャレンジした時以来かも？ いやいや、もしかすると今日が初めてかもしれないぞ」

「満足したかな？」

「おう。お客様満足度No.1も目じゃないくらい満足だ。ああでも、そういう企業は得てしてあぐらをかいてしまって、No.1から転落するんだよな」

道中ずっとこんな感じで、僕が二言三言返すたびに、船人はその何倍もの量の言葉を返してきた。しかし、話題に関係ある物から無いものまで、とにかく無作為に喋っている印象を受ける。

「やっぱりさ、俺は常に改善を求めないとだめだと思うんだよ。世の中はどんどん新しい技術が出てくるし、顧客の要求も変わっていく訳だから、何事にも完成は存在しないと思うんだ。もちろん、複雑化が進めば進むほど、付いてこれなくなる人もいる。だから、あえて簡潔に分かりやすく作る事も当然重要なんだけど。だからといって、高性能、高機能路線を捨てて良い訳では——」

「ねえ船人」

「ん？」

僕は、ひたすらしゃべり続ける船人を制止した。そして、聞く。

「どうして君は、僕の言う事を素直に信じるんだい？」

これは、初めて会ったあの日から感じている事だった。この少年は、それがどれほど荒唐無稽な事でも、信じるのだ。

「そ、そりゃお前、友達だからだろ。言わせんな恥ずかしい」

船人は少し躊躇した様だが、それだけを早口で言った。

「無条件に信じる事が、友達って事なの？」

「ああ、この惑星ではそうなんだ」

「ふーん」

僕は相づちをうつ。船人は多分、僕がその話を信じたと思っているだろう。けれど、それは間違っている。なぜなら、それが嘘だという事が、僕には分かるからだ。宇宙一の技術力、舐めてもらっては困る。

それでも頷くのは、僕はこの少年との関係を友好的な物にしたいからである。『信じるのが友達』という船人の言葉通りに、僕は行動をしている訳だ。

その後、あれだけ饒舌だった船人が黙ってしまった為、しばらく無言で歩く事になった。

そして僕が丁字路を左に曲がろうとすると、再び船人が口を開いた。

「あ、俺こっちだから」

「あ、うん」

「先輩には、俺の方からよろしく伝えておきますので」

「うん。それは頼んで無かったけど、重要だね。よろしく」

「では、また週明けに」

そうして、あっさりとは人は去っていく。

その背中を見て、僕はつぶやいた。

「もっと、観察が必要みたいだね」